

留学生科目における語彙指導の研究

田 伊 徳 中
辺 藤 田 條
和 誓 清
子 子 恵 美

序

本論文は、日本女子大学留学生科目担当者による語彙指導に関する共同研究の報告である。昨年度から留学生科目の担当者によって、語彙指導を共通テーマと設定し、多角的に語彙指導を考えることを始めた。昨年度は、初年度ということで、何が問題かを明確にすることを目的とし、「留学生科目における語彙指導の工夫」という題目でそれぞれが自分なりの研究テーマや関心をまとめた。本年度は、日本語IC（口頭表現）担当 徳田恵、日本事情（目白）日本語IA（西生田）担当 伊藤誓子、日本語IB（作文）担当 田辺和子が、昨年度の成果の上に、中條（日本大学）と共同で実証的研究から教材開発への発展を試みた。

それぞれ担当科目の内容に即した目標があるので、語彙指導ばかりに重点を置くことはできなかったが、それぞれ異なった授業形態の中で、どのように語彙を扱うか、相互に啓発することができた。具体的には、四人は次のような視点で分析を行った。

徳田は、大学初年度の留学生が講義を聞くことで付随的に語彙知識を深めて行けるのかを実証的に検証した。その結果、わずかではあるがその可能性が示唆された。また、その前提として講義を十分に理解していることが必要であることが示された。更に語彙知識を深めていくためには、音韻情報の処理が重要であることが明らかになった。

伊藤は、昨年に引き続き、文章中の副詞の意味理解の問題を取り上げた。本年度は、命題外の副詞のうち真偽判断の副詞を対象として、文章上の意味や位置の特徴をみることによって、コンテキスト理解と関係のある副詞の現れ方を記述した。

田辺・中條は、昨年に引き続き、「コロケーション（連語）」を対象とし、昨年の学生へのクイズで浮き彫りにされた「漢語＋する」の動詞の使用を中心に「対応」について考察した。今回は、現実に即した使用状況の考察を行うため、日英二言語コーパスを使用した。そして、日本語教育ではほとんどまだ行われていないコーパスに基づいた教材開発化を試みた。コーパスの実践利用は新たな語彙教育の可能性を示すものがある。

以下、徳田、伊藤、田辺・中條の順に報告をする。

1. 講義を聞くことで付随的に語彙知識は深まるか？ —大学初年度一学期目の留学生を対象に—

徳 田 恵

1.1 はじめに

本学の留学生は日本語能力試験1級、ないしは2級を取得後に入学してくるが、大学の講義を十分に理解するにはまだ語彙が不足していると思われる。講義を聞きながら付随的に語彙を学習していくことが必要とされる。そうしたことが実際に可能なのか簡単なアンケートを行い尋ねたところ、10人中6人が「講義中出てきた新しい言葉を覚えることができない」と答えていた。しかし、意味を覚えられたかどうかだけで語彙学習を測定するのは適当ではない。というのは、ある語を知っているというのは、その語の様々な側面の知識を持っていることだからある (Nation 2001)。未知語であったものが意味を覚えるまでいかになくとも、聞いたことや見たことがある段階に進むだけでも語彙学習が進んだと言える。また、受容レベルの語が産出レベルにまで発展したら、これもまた語彙学習が進んだと言える。つまり、意味を知っている語の数が増えるだけでなく、ある語の知識が形を認知するところから用法を正確に理解し産出できるところまで深まっていくことも語彙学習なのである。そして、こうした語彙知識は少しずつ累積していくものである (Nagy, Anderson & Herman 1987)。しかしながら、実際にはどのように語彙知識が深まり、蓄積されていくのかを見ていない研究が多い。そこで、本研究では講義を聞くことで語彙知識を深めていけるのかを実証的に検証することとした。

なお、本稿においては、付随的語彙学習を内容理解を目的として語彙学習以外の学習を通じて語彙を副産物をして学ぶこと、と定義する。「付随的」という語は、英語の *incidental* の訳であるため、*intentional* の対義語として学習者にその語を覚えようとする意図がないものと理解されてしまうが、学習者の意図は研究者側がコントロールできるものではない。そこで、本稿では覚えようとする学習者の意図は問題にはせず、上記のように定義する。

1.2 先行研究

第二言語 (以下L2) で講義を聞くことによって語彙学習が進むかどうかを調べた研究にVidal (2003) がある。第一言語をスペイン語とする観光学専攻の大学1年生116人を対象にL2である英語で話されている3つ

のトピック (経済、社会文化学、環境) の講義ビデオ (各14-15分) を見せ、その直後と4週間後に語彙知識が深まっているかどうかを Paribakht & Wesche (1997) の Vocabulary

表1 Vocabulary Knowledge Scale (Paribakht & Wesche 1997)
訳: 谷内 (2003)

内省報告のカテゴリー

- | | |
|--------------------------|----------------------------------|
| I | 以前にこの語を見たことがあるかどうか思い出せない。 |
| II | 以前にこの語を見たことはあるが、意味は分からない。 |
| III | 以前にこの語を見たことがある。この語の意味は_____だと思う。 |
| IV | この語の意味を知っている。意味は_____である。 |
| V | この語を使って文をつくることができる。_____ |
| ※Vを回答した人は、IVについても回答すること。 | |

表2 Vocabulary Knowledge Scaleの評定基準 (Paribakht & Wesche 1997) 訳: 谷内 (2003)

内省報告のカテゴリー	得点	得点の意味
I	1	対象語へのなじみが全くない
II	2	対象語へのなじみはあるが、意味は分からない
III	3	同義語や第一言語での翻訳を報告できる
IV	4	文の中で対象語を意味的に正しくつかうことができる
V	5	文の中で対象語を意味的にも文法的にも正しくつかうことができる

Knowledge Scale (以下VKS) を用いて測定した。VKSとは、表1に示した5段階評定によって、ある語についてどの程度の知識があるか被験者に内省報告してもらい、それを表2の評定基準に従って得点化していく、という方法である。こうした実験の結果、語彙テストの総合得点において講義直後では、視聴前より有意に語彙知識が深まっていることが明らかになった。

しかし、Vidalの実験方法には統制群が設けられていないという問題点がある。統制群が設けられていないということは、直後テストの結果が講義を視聴したことによるものなのか、事前テストで一度目にしたことによる影響が関与しているのかははっきりしない、ということである。

とはいえ、教育現場では、一部の学生に学習の場を与えないような統制群を用いた実験を行うことは倫理上の問題がある。この点は、VKSの各得点が未知語レベルから形の認知レベルまで伸びたのか、それとも意味の理解や産出まで伸びたのかを分析することにより、補うことができると考えられる。例えば、内省報告が事前テストでI (未知語) だったものが直後テストでII (「見たことがある」) に変化した場合には事前テストで一度目にしたことによる影響が関わっている可能性があるが、III以上に伸びたのであれば文脈を持った講義を聞いた結果、語の意味や用法が分かるようになったと思われるので、講義による付随的語彙学習が進んだと言えよう。

また、Vidal (2003) のように総合得点だけで語彙知識が深まったかどうかを見るのは適当ではなく、個々の語に注目すべきである。それは、VKSを用いた測定では被験者は一語一語について内省報告をしているわけであるから、そうした語レベルの得点の伸びに注目した分析が重要だと考える。その語が持つ要因やその語の出現した講義の文脈の影響があるのかどうか注目したい。

以上のことを踏まえ、本研究では本学のように日本語能力試験1級・2級レベルの学生が大学入学の一学期に講義を聞きながら付随的に語彙知識を深めていくことができるかを調査するために、次のように研究課題を設定した。

研究課題1 Vocabulary Knowledge Scale の総合得点において、講義を聞く前と後では語彙知識の深さに変化は見られるか。

研究課題2 Vocabulary Knowledge Scale の各得点は、講義を聞く前と後ではどのように変化するか。

研究課題3 Vocabulary Knowledge Scale での各語の得点の伸びは、語によって異なるか。

1.3 研究方法

1.3.1 方法

実験計画

研究課題1は、テスト時期を独立変数、テスト得点を従属変数とする一要因の分散分析を行う。

研究課題2は、事前テストの各段階（得点）の語が直後テストではどの段階に何%伸びたか記述的に分析を行う。

研究課題3は、語ごとに事前テストから直後テストの得点の伸びを集計し、記述的に分析する。

被験者

日本語I-Cクラスの受講生11人を対象に調査を実施した。本稿では、そのうち事前テストと直後テストの両方を受けた5名（ビルマ語話者3名、中国語話者・韓国語話者各1名）を分析の対象とした。

実験材料

聞き取り材料とした講義には、『講義を聴く技術』（産業能率大学日本語教育研究室編 1988）から、どの被験者にも背景知識に偏りが無く、興味を引きそうなものを基準に次の四つを選んだ。超伝導に関する講義（以下講義1）、産業の組みかえに関する講義（以下講義2）、瞳の構造に関する講義（以下講義3）、バイオテクノロジーに関する講義（以下講義4）である。

テスト材料

内容理解テストとして、内容の正誤を問う問題が課された。講義を聞いた後で文が読み上げられ、被験者は正しければ○、間違っていれば×で答えた。問題数は、講義1～3までは各5問、講義4は15問あった。

語彙テストとしてVKSで被験者に各対象語について報告してもらった。対象語は、聞き取り材料から講義の内容に関係が深いと思われる39語を選んだ。事前テストでは、対象語への注意をそらす目的で10語ディストラクターを加えた。直後テストは、時間の関係上対象語のみで実施した。なお、分析の際には、事前テストから実験当日の一週間に筆者の担当授業で出てきた2語を除き、37語を対象とした。

1.3.2 実験手続き

実験の流れを表3に示した。講義の聴解の一週間前に事前テストが行われた。実験当日は、まず講義の聴解と内容理解問題を行い、その後、干渉課題として読解と誤文訂正を行った。この読解文と誤文訂正には、対象語は含まれなかった。その後、直後語彙テストを実施した。

事前テストと講義の聴解を行う際に、被験者には後で語彙テストがあることは知らされなかった。

語彙テストは、筆者が対象語を読み上げ、被験者はまずそれを書きとってから、VKSのどの段階にあるかを回答した。書き取る際には、漢字で書いても平仮名で書いても良いこととした。こうした書き取り形式にしたのは、本研究では講義の聞き取りの際には文字情報は一切提示されな

表3 実験の流れ

時期	所要時間	実施内容
1週間前	約30分	事前テスト
実験当日	約50分	講義の聞き取り 内容理解問題
	約20分	干渉課題
	約20分	直後テスト

いからである。これは音韻情報によって語彙学習が可能かどうかを調査するためである。よって語彙テストにおいても文字情報は提示しないこととした。

また、日本語は同音異義語が多いため、音韻情報だけの提示だと複数の語を想起する可能性がある。そこで、「回答は一つとは限りません。頭に浮かんだもの全て書いてください」と教示した。

講義を聴く際にメモをとることができたが、内容理解問題終了後に回収された。

1.3.3 得点化

本研究では活動が聴解であるため、VKSの内省報告のカテゴリーⅠ～Ⅲの「見たことがある」に「聞いたことがある」を加えた。なお、得点化の際には、同音異義語を答えていた場合には、対象語を知らないとみなして、1点とした。なお、複数回答についてであるが、本研究で分析の対象とした被験者の回答には複数回答は見られなかった。

内省報告カテゴリーⅢとⅣでの被験者の第一言語の回答については、母語話者に翻訳を依頼した。中国語と韓国語については日本語教育を専攻する大学院生に、ビルマ語は日本滞在7年で日本企業に勤務する母語話者の方（日本語能力試験の1級取得、日本の大学を卒業）に翻訳をしてもらった。

1.4 分析結果

1.4.1 内容理解

内容理解問題の結果を表4に示した。講義3は、ほぼ全問正解に近い得点が得られており、よく理解できたと考えられる。講義1、2、4については、60%程度の正答率であるため、少し理解が難しかったと見られる。

表4 内容理解問題の平均点と標準偏差

	平均点	標準偏差
講義1（5問）	3.40	0.89
講義2（5問）	3.20	0.84
講義3（5問）	4.80	0.45
講義4（15問）	9.80	1.79
全体	21.20	1.48

1問1点

1.4.2 研究課題1の分析

表5は語彙テストの得点結果を示したものである。この語彙テストの得点について分散分析を行った結果、1%水準で有意な差が認められた ($F_{(1,4)}=9.61$, $p<.01$) (図1)。

表5 語彙テストの平均点と標準偏差

	事前テスト	直後テスト
人数	5	5
平均点	59.00	72.20
標準偏差	11.51	20.24

1.4.3 研究課題2の分析

研究課題2（Vocabulary Knowledge Scale）による得点において、講義を聞く前と後ではどのような変化のパターンが見られるかを明らかにするため、まず事前テストから直後テストへの各語の得点の変化を集計した。それを割合で示したのが表6である。表6の見方であるが、縦軸が事前

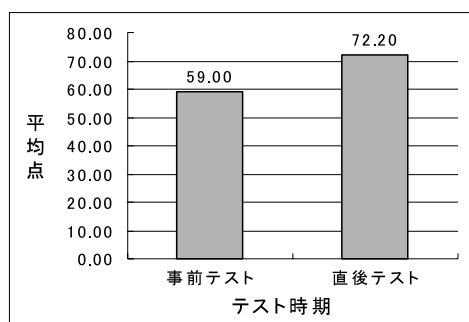


図1 語彙テストの得点の変化

テストの得点、横軸が直後テストの得点である。割合で示したというのは、例えば、事前テストで1だった語数（120語）を100と換算して、直後テストでも得点1のまま変化しない語は、その55%（66語）であった、ということである。

事前テストでどの得点の段階にあった語でも、直後テストで変化

していないものの割合が高かった。事前テスト得点が1の語ではその55%が、事前テスト得点が2の語ではその72.50%が、事前テスト得点が3の語ではその70.59%が変化していなかった。

最も伸びているのは、事前テストでの得点1から直後テストでの得点2への変化であった（30.83%）。

事前テストで得点が1だったものでは、10.83%が、事前テストで得点が2だったものでは7.50%が直後テストで聞いて意味が分かる受容レベル（得点2, 3）にまで伸びていた。

事前テストで得点がどの段階でも、直後テストで得点4へと伸びる語は見られなかった。

直後テストで得点が5まで伸びた語は、事前テストで得点1だったもののうち3.33%、事前テスト得点が2だったもののうち2.50%、事前テスト得点が3であったもののうちでは5.88%であった。すなわち、わずかながら、事前テストで未知語（得点1）であったり、受容レベル（得点2, 3）であったりしたものが、直後テストで産出（得点5）にまで結びついている語が見られた。

表6 VKSにおける得点の事前テストから直後テストへの変化

直後テスト 事前テスト	1	2	3	4	5
1	55.00	30.83	10.83	0.00	3.33
2	17.50	72.50	7.50	0.00	2.50
3	11.76	11.76	70.59	0.00	5.88
4	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
5	0.00	0.00	25.00	0.00	75.00

(%)

1.4.4 研究課題3の分析

研究課題3（Vocabulary Knowledge Scaleでの各語の得点の伸びは、語によって異なるか。）を明らかにするため、語ごとに事前テストから直後テストへの伸びを算出した（表7）。

表7を見ると、語によって得点の伸びにばらつきがあることが分かる。特に語彙知識が深まったと考えられる語としては、瞳孔・白目・黒目・バイオリクター・多角化が挙げられる。これは事前テストから直後テストへの得点の伸びが1以上あった語である。また、語彙知識が深まらなかったと思われる語は多数ある。伸びがマイナスになっている語は、直後テストの得点が事前テストの得点より下がってしまったものである。以上の通り、語彙知識が深まった語もあれば、変化しないもの、また後退してしまったものも見られた。

1.4.5 結果のまとめ

研究課題ごとに結果をまとめる。

(1) Vocabulary Knowledge Scaleの総合得点において、講義を聞く前と後では語彙知識の深さに変化は見られるか。

事前テストから直後テストへの得点の伸びは有意であったので、語彙知識の深さに変化が見られたと言える。

表7 対象語と事前テストから直後テストへの得点の伸び

講義 No.	対象語	得点の 伸び	講義 No.	対象語	得点の 伸び	講義 No.	対象語	得点の 伸び
1	臨界温度	0.60	2	搭載	0.20	3	利己的	-0.20
1	超伝導	0.60	2	一眼レフ	0.00	3	黒目	1.40
1	アルミニウム	0.00	2	経営戦略	0.20	4	品種改良	0.60
1	磁器	0.00	2	繊維	-0.20	4	酵素	-0.40
1	白目	1.40	2	比重	0.40	4	バイオリアクター	1.20
1	セラミック	0.40	2	多角化	1.20	4	センダイウイルス	0.40
1	電気抵抗	0.60	2	名門	0.20	4	食糧	0.20
2	本質的	-0.20	2	価値連鎖	0.40	4	酵母	0.40
2	便宜的	0.40	2	垣根	0.20	4	大腸菌	0.00
2	業種	0.20	3	瞳孔	1.00	4	栄養失調	-0.20
2	種明かし	0.20	3	虹彩	0.60	4	培養	-0.20
2	分業	0.40	3	瞳	0.40			
2	バリューチェーン	0.40	3	構造	0.40			

(2) Vocabulary Knowledge Scaleの各得点は、講義を聞く前と後ではどのように変化するか。

事前テストから直後テストへ変化しないパターンが最も多く見られた。伸びた語のうち、事前テストで「聞いたことがない」段階から直後テストで「聞いたことがある」に変化するパターンが最も多かった。割合は少ないが、受容レベル（得点3）にまで伸びるパターンも認められた。更にわずかだが、未知語であったものや受容レベルであった語が産出レベル（得点5）まで伸びるパターンが見られた。

直後テストにおいて得点が4になる語は見られなかった。つまり、その語を使って意味的には正しい文が産出できるが用法的に誤っている、という回答は本研究では見られなかった。

(3) Vocabulary Knowledge Scaleでの各語の得点の伸びは、語によって異なるか。

語によって得点の伸びに差が認められた。事前テストから直後テストへ語彙知識が深まった語も見られたが、変化しなかったり後退してしまったりする語も見られた。

1.5 考察

本研究の目的は、講義を聞くことで付随的に語彙知識を深めていくことができるかを検証することにある。この点において、研究課題1と研究課題2の分析結果を合わせて、考察を進める。

研究課題1の分析結果では、事前テストと直後テストの得点の間に有意な差が見られた。このことから、直後テストの段階では事前テストを受けた時点より語彙知識は深まっていると言える。しかし、これが講義を聞いた結果かどうかは、研究課題2の分析を考慮しなければならない。

研究課題2での分析の結果、VKSの得点が事前テストで1だったものが直後テストで2に変化するものが最も多かった。これは、未知語レベルから語形認知にまで語彙知識は深まったが、事前テストで一度語を聞いたことによる影響なのか講義を聞いた学習効果なのか判断がつかないものが多いということである。

しかし、これは教育的には否定的に捉えることはないと思われる。現実には、一時間の講義の中だけでなく、年間（或いは半年）通して同じ語が、繰り返されることは普通である。その際には語の意味や定義に関して説明がある場合もあれば、無い場合もある。つまり、ある語を事前テストで一度聞いて、更に講義でまた聞くのと同じ現象が日常的に起こっている。このことから考えて、この結果は日常的にも付随的に語彙学習が起こっている可能性を示唆するものであろう。

研究課題2の分析の結果、わずかであるが直後テストの得点が3以上に伸びている語が見られたので、講義を聞いた結果語彙知識が深まる語もあると言える。

一方、語彙知識を深めることが、なかなか難しいことも捉えられた。例えば、VKSの得点が2の「聞いたことがある」レベルのままである語が多かった。このレベルの割合が高いということは、私たちがよく経験する「聞いたことはあるのだが、なかなか意味が覚えられない」という語彙学習における最初の壁のようなものを表しているのだろう。また、VKSの得点が3のままの語が多いことと、3から5への変化が約5%しかないことを合わせて、受容レベルから産出レベルに進むのがまた難しい、語彙学習の第2の壁を表していると思われる。

なお、今回の調査では直後テストにおいて得点が4へと進む語がまったくなかった、つまり、文産出の際に用法を誤る語がまったくなかったのだが、これは本研究の対象語の性質によるものと思われる。本研究の対象語は名詞が多かったこと、また、副詞であってもそれと分かる「～的」が付いていた。このため用法を誤ることなく文の産出ができたのだろう。

研究課題3の分析の結果から、語彙知識の深まりには語によって差があることが明らかとなった。なぜ語彙知識が深まる語とそうでない語があったのであろうか。

まず、語彙知識が深まった語は、講義の内容理解がよくできていたことが要因だと考えられる。「瞳孔・白目・黒目」が出現した講義3は他のトピックに比べてよく理解できていた（表4）。また、「バイオリクター」については、それについて聞かれた内容確認問題の解答を見たところ、5人中4人が正解だった。同様に「多角化」に関する問いについては、全員が正解であった。

一方、語彙知識が深まらなかった語は、音韻処理がうまくいかないことが大きな要因と考えられる。これは、本研究の実験方法では視覚情報の提示がなかったため、音韻処理が重要になったものと思われる。深まらなかった語の多くに音韻情報の捉え方としてなんらかの問題が見られた。

まず、音韻を正しく聞き取れないために、語彙知識が深まらなかった可能性が考えられる。正しく聞き取れないため、どんな語も想起できないケースが見られた。例えば、「利己的」は「りこう的」「立こう的」、「一眼レフ」は「いちがんれい」という回答があった。また、正しく聞き取れないために別の語を想起してしまったものも見られた。例えば、「搭載」は「とうさん（倒産）」、「酵素」は「こうそう（構想）」、「こうじょう（工場）」、「酵母」は「こうほ（候補）」と誤って聞き取っていた。

次に同音異義語の影響が考えられる。正しく音韻を聞き取れても別の語を想起してしまうため、語彙知識が深まらなかったケースがいくつか見られた。本研究では得点化の際、同音異義語を答えた場合には対象語を知らないと見なした。そのため、事前テストで同音異義語を答え、直後テストでも同じ語を答えた場合には、得点が1のままであった。その同音異義語が絶対に使われるはずがない文脈で対象語が出現しているにもかかわらず、講義を聞いた後でも事前テストと同じ同音異義語を回答しているケースが見られた。例えば、超伝導物質の説明において出現した

「磁器」に関しては全員が「時期」と回答していた。バイオテクノロジーに関する講義で出現した「酵素」を「控訴」と回答した被験者もあった。また、実在する同音異義語ではないが、同じ音韻情報を持ち、別の意味を持つ語を造り出すというケースも見られた。例えば、「瞳」という語を聞いた際に、「人見」（人のスタイル）、「一見」（一回見ること）という語を回答していた。

更に、対象語が埋め込まれた文脈とその語がもつ音韻情報に影響される可能性がある。講義のテーマや似た音韻を持つ語に影響され、聞き取りの段階で誤ってしまい、語彙知識が深まることが阻害されたようである。例えば、バイオテクノロジーの講義において、「培養」を全員が「バイオ」と勘違いしていた。

1.6 結論

日本語能力試験1級・2級レベルの留学生が一学期目に講義を聞きながら付随的に語彙知識を深めることは、わずかではあるがその可能性があるとし唆される。やはり、語彙学習は少しずつ累積して増大していくことが明らかになった。また、内容理解問題がよくできていた語で語彙知識が深まっていたことから、付随的に語彙知識を深めるには講義を十分に理解していることが前提となると言える。更に、語彙知識を深めるには音韻情報の処理が重要であると言える。近年、ワーキングメモリの研究において、音韻情報を処理する音韻ループが言語獲得に非常に重要な役割を担っており、母語において音韻ループ内での復唱が新しい語を習得する際にきわめて重要である、と言われている（門田 2007: 165-169）。馴染みのない疑似単語を聞いて繰り返せない場合には第二言語習得も難しい、ということである。本研究の被験者も疑似単語ではないが、馴染みのない語を聞いて正しく音韻処理できないものは語彙知識が深まらなかった。もちろん実際の講義では視覚情報が提示される場合もあり、音韻処理だけに頼らなくてもよい。しかし、別の機会にその語を聞いて意味と形を想起するには、やはり音韻情報が正確に頭に残っていなければならない。この点から、L2においても音韻情報の処理が重要だと思われる。

参考文献

- 門田修平（2007）『シャドーイングと音読の科学』コスモピア
- 産業能率大学日本語教育研究室編（1988）『講義を聞く技術』産業能率大学出版部
- 谷内美智子（2003）「付随的語彙学習に関する研究の概観」『第二言語習得・教育の研究最前線』日本言語文化学会78-95.
- Nagy, W. E., Anderson, R. C. & Herman & P. A. (1987) Learning word meaning from context during normal reading, *American Educational Research Journal*, 24, 237-270.
- Nation, I. S. P. (2001) *Learning vocabulary in another language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Paribakht, T. S. & Wesche & M. (1997) Vocabulary enhancement activities and reading for meaning in second language vocabulary acquisition, In Coady, J., and Huckin, T., (Eds.) *Second Language Vocabulary Acquisition: A Rational for Pedagogy*, Cambridge: Cambridge University Press, 174-200.
- Vidal, K. (2003) Academic Listening: A source of vocabulary acquisition?, *Applied Linguistics*, 24, 56-89.

2. 文章理解における真偽判断を示す副詞の機能

伊 藤 誓 子

2.1 はじめに

読解作業において、副詞はコンテキストとのかかわりの中で読み取っていかねばならないことを提案した（伊藤2008）。特にモダリティを表す命題外¹⁾の副詞は、命題内の副詞に対して文章の流れから理解すべき度合いがより大きいと言えたが、命題の外、内の条件だけで必ずしも明確に区別されるわけではない。そこで、命題外、内に関わらず、ある種類の副詞はコンテキストを踏まえて表現されているとして、その観点で副詞を分類することが読解において有効であると考え。そのためには、コンテキスト理解と関係の深い副詞の使われ方の典型を出す必要がある。本稿では命題外の副詞のうち真偽判断の副詞を取り上げ、文章上の意味や位置を見ることによって、コンテキスト理解と関係のある副詞の特徴を記述することにする。

2.2 真偽判断の副詞の使われ方

中右（1980）は、副詞を10に分類²⁾した。そのうち、真偽判断の副詞は、「定義上、命題の枠外にあるモダリティ表現」（p.195）である。その機能は、「命題の真理値の度合を査定すること」（p.204）である。例としてあげられている日本語の言葉は以下である。

おそらく、多分、もちろん、むろん、きっと、必ず、定めし、さぞ、確か、確かに、明らかに、思うに、考えるに、つらつらおもんみるに、疑いもなく、ひょっとして、もしかすると、一見（したところ）、願わくは、わたしの見るところ（では）、わたしの知るかぎり

命題外副詞は、「コンテキストとの関わりが深い語彙であると推測できる」（伊藤p.37）。また、例からみても慣用的に使われることばが多いので、実例があげやすいとも予想されるため、真偽判断の副詞をこの度の対象とした。

検討する文章は、2007年留学生科目 Ia で扱った教材（同p.35）のうち、「元気な女の人たちについての考察」（村上春樹）、「正月」（青木たま）、「物のころ」（阿刀田高）で、いずれもエッセイである。この中で使われている真偽判断の副詞のうち、前述した中右の具体例にあることば（おそらく、多分、きっと、確かに、もちろん）を対象に、文章展開上、どのように使われているのか、また、現れる位置に特徴があるかどうかをコンテキストとの関わりから記述してみる。

資料①「物のころ」（1397字）

要旨：十数年前購入したジャケットが古くなり、捨てるつもりであるのに一品物にだって心はあるさ—という思いから、捨てられずにいる。このような物へのアニミズム的愛着は、自分だけでなく他の人にもあるようで、五木氏の書いた物語の中にも見受けられることができる。また、置き捨てられた自転車をみつけると、この自転車にも愛顧を受けた昔もあったろうと感慨を持つ。

次に示す例文1は、資料①の文章中で真偽判断の副詞「おそらく」が使われている文である。

例文1 おそらく五木さんもマイカーに対するアニミズム的な愛着から、この短い物語の発想を得たにちがいない。

この文が文章中のどこに位置するかを文章全体の流れの中で示す。

〔文章全体の流れ〕

十数年前に購入したジャケットをさんざん着用したが、いとおしさから捨てられず、いまだに持っている。一品物にだって心はあるだろう—と思い、私はビヘイビアにおいて幼稚なアニミズムを抱いているところがあるようだ。

↓

五木寛之氏のショートショート『老車の墓場』を紹介。ポンコツ車が、自分（車）を捨てられずにいる持ち主の若夫婦を思い、自ら命を絶とうとする話である。

↓

＜例文1 おそらく五木さんもマイカーに対するアニミズム的な愛着から、この短い物語の発想を得たにちがいない。＞

↓

自転車置き場に置き捨ての自転車が目立ち、捨てられた自転車にも心があるだろう、愛顧を受けた時代もあっただろう、と思うとあわれな末路だと感じる。

「おそらく」について、『現代副詞用法辞典』には次のような記述がある。

ややマイナスよりのイメージの語。(略)「おそらく」の表す可能性はかなり幅があり、ほとんど確実なもの、十中八九のものなどがあるが、いずれも主観的な根拠に基づく可能性の推量であって、客観的な根拠を暗示しない。(P.101)

これを踏まえて例文1で「おそらく」が使われている意味を考えると、

- 1 例文1の内容は、文章中で引用した物語の作者である五木寛之から直接聞いたことではなく、自分の主観的判断によるものである。
- 2 物に対するせつない気持ち（ややマイナスよりのイメージ）を表すためには、「たぶん」「きっと」ではなく「おそらく」が適当である。

という理由からこの副詞が表現されていると説明できる。特に2はコンテキストから判断できる理由である。書き手が使った「物」に対して「心があるだろう」という愛着があるからこそ別れ難い気持ちを持っていることを文章の前半で述べてから、同じような発想から生まれているであろう物語を紹介し、その物語の裏にある作者（五木氏）の気持ちを推察する文がこの「おそらく～」である。「おそらく」は、単に文内容が書き手の推量の域を超えないものだから使っているというだけでなく、前半で述べた“自己の行動を裏付ける物に対する愛着とそれにまつわるせつない気持ち”と同じ心理が他の人にも見受けられるというコンテキストの中で使われている副詞である。

資料②「正月」(3713字)

要旨：子どもの頃の正月の思い出を綴っている。できのよくない自分にとって気が重かったこ

との一つに“書初め”があった。小説家の祖父から立派な道具を賜り、母から特訓を受けた様子、そして、担任の先生からほめられると母の特訓があっさりなくなったことをいくつかのユーモアを交えながらほのぼのと描いている。

例文2

「でも、もし戦災で焼けなければ、多分、一生ものの黒い机と、緑の輪を持った硯を、祖父から貰った宝物として持っていただろう。そして目から火が出るほど、母がたたけば、きっと人並みな字が書ける可能性はあったと信じている。」

例文2は文章全体の最後に位置する。文章全体の大体の流れを示す。

〔文章全体の流れ〕

子どものころ（戦前）の慌しい正月の様子。

最も気が重いのは二日から始まる稽古始めのうち、特に手習いであった。

↓

小説家の祖父から頂き物の立派な硯をもらい受けた。自分は、まだ小学生の上、上手ではないので位負けしていたし、上達もせず、母に厳しく小言を言われながら習字の稽古をした。

↓

母と担任の先生とのユーモラスなやりとりの中で、先生が（母の気持ちを察して）子（書き手）の習字の上達したことを褒めたところ、母の機嫌がよくなった。

↓

母は安心し、その後、特訓はなくなった。

その結果、私（書き手）は相変わらず筆は持てず墨猪（習字の下手なこと）のままだ。

＜例文2　でも、もし戦災で焼けなければ、多分、一生ものの黒い机と、緑の輪を持った硯を、祖父から貰った宝物として持っていただろう。そして目から火が出るほど、母がたたけば、きっと人並みな字が書ける可能性はあったと信じている。＞

「多分」「きっと」について、『現代副詞用法辞典』に以下のような説明がある。

「多分」；好ましい事柄についても、好ましくない事柄についても用いられる。話者の主観に基づく可能性の推量を表し、客観的な根拠は暗示されない。また、実現の可能性はそれほど高くなく、結果については特別の感情を暗示しない。(p.277)

「きっと」；確信をもっている様子を表す。ややプラスイメージの語。この確信はかなり主観的で、客観的な根拠は暗示されないことが多い。

主体が相手の場合は、相手の行為について話者が強い信頼をもっていることを暗示し、結果的に相手に強く要望している意味になる。主体が話者の場合は、自分の行為を確信している意味になり、結果として話者の強い決意を表す。(p.132)

「多分」も「きっと」も共に主観に基づく推量を表すことばである。違いは、「多分」よりも「きっと」のほうが確信の度合いが高いことである。実際の文章に照らしてみると、「多分」は、祖父からもらった手習いの道具を持っているということに対して、「きっと」は、自分の習字の

上達に対して使われている副詞である。祖父からの道具を「宝物」と称し、愛着の心が表れているが、子どものころは小学生なのに大そうな道具立てで気が重かった物である。「多分」という程度の副詞には、その戸惑いの心が表れていると読める。

一方、自分の手習いについては、「きっと人並な字が書ける可能性はあったと信じている」と書いている。自分自身を客体化して、優秀とはいえなかった自分でも「きっと～可能性はあった」と楽観的な希望的観測を述べる。こういう気持ちになったのは、小学校の担任の先生と母親のユーモラスなやりとりの思い出が根底にあり、明るい余韻を残す効果を發揮している。両副詞ともコンテキストの読み取りの上で生きる語である。

資料③「元気な女の人たちについての考察」(7860字)

要旨：アメリカ人からよく聞かれる質問、「奥さんは何をしているのか」に対する答えとして、聞いた人にとって期待される回答像がある。特に、アメリカ東部の知的階級社会では誰もが納得するような何かを用意しておかなくてはならない。だが、書き手は「自分は自分」の考え方で生きているから、そういった枠組みに懐疑的になってしまう。そして、小説家である書き手とその秘書のような仕事をしている妻がここに至った経過を述べた後、アメリカでのフェミニズムへの関心の強さについて例を挙げ、自由の国のようであっても考えが固定化している人がいることを指摘する。一方、実際にアメリカの文学業界で働く元気な女性との仕事は楽しいし、彼女らは偏った答えを求めるような質問もしない。いずれにせよ枝葉末節にこだわらずに生きていきたいし、何かをかさにきている人は信用できない。

このエッセイには真偽判断の副詞「確かに」が7箇所、「もちろん」が4箇所使われている。例文3と4は、それぞれの一箇所めが含まれる文である。

例文3

「たしかにそう言われればそのとおりであって、僕としては反論のしようもない。」

例文4

「「そんな面倒なこと抜きでのんびり旅行したい」と言っているのだけれど、そういうことはもちろん伏せておく。」

例文3と4が使われている前後の文脈を示す。

〔前後の文脈〕

アメリカ人から「奥さんは何をしているのか？」と質問され、ありのまま（僕の編集者兼秘書の仕事）を答える。

↓

アメリカ人の期待している答えではないから、相手はその答えに納得しない。

↓

<例文3 たしかにそう言われればそのとおりであって、僕としては反論のしようもない。>

↓

しょうがないので、奥の手として事実ではあるが表現を変え、相手の納得するように、多少デフォルメした答えを言う。

＜例文4 「(奥さんは) そんな面倒なこと抜きでのんびり旅行したい」と言っているのだけれど、そういうことはもちろん伏せておく。＞

↓

東部の知識階級で顕著な例ではあるが、アメリカでは自由の国を標榜している割に外枠が硬いと感じる。

最後の、「(東部の知識階級で顕著な例だが) アメリカは、自由の国を標榜している割に外枠が硬いと感じる。」という感想を示すために、この一連のエピソードを書いていると読める。

「たしかに」について、『現代副詞用例辞典』(p.89)には「知的な理解や保証に基づく主観的な確信を暗示する。」とある。例文3の「たしかに」によって、冷静な思考を表現し、やみくもに相手を否定しようとしているのではないという姿勢を示す。その思考が最後の感想に信憑性をもたらしている。

例4の「もちろん」は、同辞典には、「明白な意見や判断を述べる様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。(p.548)」とあり、ここでも明白に判断して使われていることがわかる。具体的には、アメリカ人に対しては「(事実の一部を) 伏せておく」ことが必要であると判断している。ここまでの文脈を把握していないと、なぜ「この伏せる」という判断を明白に行うのかわからない。文章展開の理解が前提となって「もちろん」の意味が生きてくる。

以上より「たしかに」と「もちろん」は、文を越えての読みに関わることばであるということができる。

ここまで、真偽判断の副詞がコンテキストの流れの中で表現されていることをみてきたが、例文5のように一部の真偽判断の副詞にコンテキストと大きく関係しないものもある。

例文5

「道路の一角を勝手に自転車置き場にしているケースも困ったものだが、明らかに捨てられた自転車も多い。(「物のこころ」)」

自転車置き場に置かれている自転車の中に、持ち主が取りに来る可能性がないと「明らかに」わかる自転車がある、という内容であるが、副詞「明らかに」は、この一文内で意味が完結している。真偽判断の副詞であっても一文内で理解が収まるものもあるようだ。

だが、例文1～4で見たように、多くの場合、真偽判断の副詞はコンテキストの流れの中で表現の意味が生きてくる。中右(1980)では、真偽判断の副詞の本来の性質について「その查定的判断が話者の発話時における心的態度を表出するものである。」(中右p.205)と言及している。この「話者」を文章における「書き手」と置き換えると、書き手の真偽判断副詞の使用時における心的態度を、読み手はコンテキストから理解する必要があることを本稿の検討から確認することができた。

2.3 まとめ

本稿では真偽判断の副詞の様相を見た。これを踏まえて、今後は他の種類の副詞を取り上げ、テキスト理解の観点から副詞の分類について検討していきたい。また、資料③は、「たしかに」と「もちろん」が文章全体を通して多く使われている印象があるという特徴があった。このような同

語の副詞の繰り返しが書き手の意図をどう反映しているのかも検討課題として考えていきたい。

注

- 1) 中右(1980)では、副詞を命題の内側にある副詞(命題内副詞)と外側にある副詞(命題外副詞)に二分している。命題外副詞には「価値判断」「真偽判断」「発話行為」「領域指定」「接続」がある。
- 2) 命題外副詞5種(注1)と命題内副詞5種(「時・アスペクト」「場所」「頻度」「強意・程度」「様態」)の計10種示されている。

参考文献

- 伊藤誓子(2008)「モダリティを表す副詞のコンテキストとの関わり」日本女子大学紀要 文学部第57号 pp.35-40
- 中右実(1980)「文副詞の比較」日英語比較講座第2巻 國廣哲彌編著 大修館書店
- 飛驒良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版

資料

- ① 青木たま「正月」『小石川の家』講談社文庫 1994
- ② 阿刀田高「物のころ」『日本語上級読解』(日本語教材)アルク 2000
- ③ 村上春樹「元気な女の人たちについての考察」『やがて哀しき外国語』講談社文庫 1997

3. パラレルコーパスの教育的利用によるコロケーションの一考察

田 辺 和 子 (日本女子大学文学部)

中 條 清 美 (日本大学生産工学部)

1. コーパスの日本語教育への利用

近年、コーパスを利用した言語研究が新たな分野として注目を浴び、日本語研究でも取り組まれるようになった(丸山、田野村 2007)。しかし、教育現場からの実践例の報告、さらに、その教材化についての報告は、皆無に近いといってよいであろう。本研究では、コーパスの教育現場での利用を第一目的とし、教材化にあたってどのような工夫が必要かその方向性を模索した。日本語教育全般の現状として、コンピュータを各学習者がそれぞれ一台ずつ同時に利用できる環境が十分整っていないため、英語教育における、「データ駆動型の学習」(DDL: Data-driven Learning) (例えば、中條他 2008) のような、コーパスと検索プログラムを用いて学習者に文法規則や意味・用法を読み取らせる学習形態は、想定しにくい。したがって、本研究では、少なくとも指導者がコーパスを授業準備の段階で利用することで、教室指導や教材作成にどのような変革が期待できるかという点について検討した。また、コーパスを検索して得られたコンコーダンス画面を印刷した資料を配布することによって、DDLと同等に「学習者は、教材として与えられたコーパスを『言葉の探偵 (language detectives)』」(Johns 1997: 101) となって解析し、自力で様々な言語の傾向性や法則性を発見していく活動にできるだけ近い状況を作ることにも配慮した教材例を試作した。

2. パラレルコーパス

本研究で使用したコーパスは日本語文と英語文を対応付けた日英パラレルコーパスである。情報通信研究機構で作成された「日英新聞記事対応付けデータ」(内山、井佐原 2003) であり、<http://www2.nict.go.jp/jt/a132/members/mutiyama/jea/index-ja.html>より無償で公開されているものである。これは、約12年分の「読売新聞記事」の日本語と *The Daily Yomiuri* の英語文で構成されている。

パラレルデータを扱うソフトウェアとしてBarlow (2004) のParaConcを使用した。まず、検索したい語(英語または、日本語)を調べると該当する日本語文・英語文が2分されているそれぞれの画面に出てくる(図1.2参照)。そして、カーソルをたとえば、日本語のある部分に当てると、そこに対応する英語部分が下の画面で明示される。

日英パラレルコーパスとParaConcを利用したDDL教材の開発および指導実践は、英語教育分野では2004年より日本大学において開始されている(中條他 2005; 2006; 2007)。本稿では、その使用法、教材例、指導法を参考にした。

3. 日本語授業における研究の出発点

「新聞記事が読めるようになりたい」というのは、外国語学習の代表的な目標である。これは日

た。だが、そうした状況に機敏に	に対応する	こと	こそ、首相・内閣の役割
見直す。情勢の急変に柔軟に	に対応する	こと	不可欠だろう。子守や
宇宙から観測し、国際情勢	に対応する	こと	も考えなければならぬ
日本の政治が、悪化すると、雇用情勢の悪化など、新しい問題など、大綱で提言した。二十一世紀の政策課題は、いわば、「新しい時代」は、本格的な高齢化社会の到来	に対応する	こと	妨げる大きな要因となっ
	に対応する	こと	は、総合政策が欠かせない
	に対応する	こと	ため、大胆な見直しも必
	に対応する	こと	首相・内閣の権限・若
	に対応する	こと	先の国会では新しい
	に対応する	こと	基盤となりうるものだ
	に対応する	こと	効果的なミサイル防衛
	に対応する	こと	の「新しい憲法論議」と
	に対応する	こと	ため、雇用や、年金、医療、
It is the time for the government	to deal with the situation boldly and flexibly		
to hold urgent discussions on how	to deal with the shift to the right in Russia		
tion to economic development and	to deal flexibly with situations so as to all		
me minister and cabinet to promptly	respond to unexpected situations. In regard		
five years, but the government must	respond flexibly to changes in the circumst		
... is also a need to study ways to	deal with environmental problems on Earth		
ed Japan's politics from promptly	responding to changes in the international si		
confront these changes quickly and	flexibly when implementing competition polic		
must take comprehensive measures	to cope with the worsening employment situati		
verhaul the Constitution in order to	deal with new issues that its drafters nev		
e 1994 national security proposal to	cope more effectively in national emergenc		
tural law during its last session to	cope with the trade liberalization of farm		
the foundation for the government to	deal with political tasks in the 21st Cent		
g an effective antimissile system to	deal with the threat of North Korea, Iran		

図1 動詞「対応する」のコンコーダンスライン

な推進と、IT革命への的確な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
詳細の誤った認識は、現実的な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
「事実関係を確かめ、速やかな対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
主れた分野で、二次補正の柔軟な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
ら、北朝鮮に対し、重ねて明確な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
なってきた。側には柔軟な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
れたこともあり、EUは迅速な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
北方の巨人」を注視した適切な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
も二十一世紀を展望した新たな対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
命先を求め、欧州諸国の柔軟な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
側も含め、訴訟関係者の慎重な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
当局との緊密な連携で、慎重な対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
地震など自然災害へのいろいろな対応	の意欲を	の途上国支援が	欠かせない
NATO's new strategy is aimed at responding more realistically and effectively			
but would move ahead with new countermeasures if the North-South talks failed			
ization, and as well as to help them cope with the IT revolution. Specifically,			
al instabilities in South Korea, may clip its desire to deal realistically with			
ward has vowed to confirm the facts regarding the BOA official and take necessa			
We hope that these necessary actions are taken boldly and promptly.			
second supplementary budget be used flexibly in fields such as environment and p			
ould repeatedly urge North Korea to respond clearly to this matter. This year m			
The prefecture should take a flexible stance.			
Japan and Europe, the EU decided to respond promptly. One of the crucial areas			
come up with appropriate measures to deal with it. Nippon Credit Bank, now plac			
al community is experiencing major transitions, in terms of both economic and p			
ce Germany's neighbors to take countermeasures. Readers who suffered from high			
parties involved, including the court, advance and remain flexible toward resol			

図2 名詞「対応」のコンコーダンスライン

本語教育にもあてはまる。筆者の教授経験からも、新聞記事はその即時性において現実の日本社会を反映していることから、学習者の専門分野にかかわらず、教室全体が熱心に取り組む教材となる。しかし、指導する側から見ると、語彙の説明に時間を取られ、指導すべき表現や文型が場当たり的になりがちなので、効率的な積み重ね学習には、不向きな教材との側面も否めない。

以上の点を考慮すると、新聞記事を教材化したものにおいては、時間的ずれは生じるものの指導項目が教育的視点で吟味されているので、新聞読解練習のはじめに使うものとして、適切である。本年度は交換留学生科目の読解授業において、『中・上級者のための速読の日本語』（三浦昭監修・岡まゆみ著、The Japan Times）中の〈7. 記事を読んでディスカッションする〉という課で新聞記事「縦書き？横書き？」と「問題英語まかり通る」を扱った。アメリカ人学生にとっては、まさにディスカッションしやすいテーマだったのだろう、授業の後に発展的な報道文読解クラスの希望があった。そこで、前述の日英パラレルコーパスを使って体系的な内容による報道文の語彙・表現理解クラスを試みることにしたのである。

4. 問題設定

「留学生科目による語彙指導の工夫～コロケーションをどう教えるか～」(田辺、2007)で、学習者の誤用の分析を通して、日本語教育において改善すべき点を挙げた。本論文では、その中から、動詞「する」が、口語では頻繁に使用されているので、書き言葉にする時、「する」の意味を的確に他の動詞に置き換えられない問題を取り上げることにした。

日本語における漢語の位置づけにおいては、以下のような見解が示されている。

漢語は名詞・動詞では微細な意味を限定的に表すものが多い。和語「なおす」に対する漢語の訂正する・修正する・修繕する・更正する・修理する・修繕する・添削する・修復する・治療する・矯正する・・・は、その例であって・・・

『語彙の研究と教育〔上〕』国立国語研究所 (p.131)

このような漢語の圧倒的な造語力に日本語が依存しているため、日本語学習者は、動詞の構成を「漢語+する」と処理し、かえって和語「なおす」の相互交換的な認識と練習が十分でない結果を導きだしているのではないだろうか。このような仮説の基に、本論文では、「N（漢語）+する（例：診断する）」動詞のNが独立して名詞「N（例：診断）」として使われた時の使用例と意味的幅について、コーパス語彙意味論的アプローチにより考察することにした。

5. コーパス語彙意味論における拡張語彙単位のモデル

本研究では、分析にあたって言語単位を定義するために、Stubbs(2006)の拡張語彙単位のモデルを参考にしたい。これは、Sinclair (1996, 1998) において提唱された概念を発展させたものであるとStubbs自身が述べている (2006, p.117)。

ここでいうレマというのは、語彙素 [lexme] ともよばれている意味の最小単位である。TAKE というようにレマは、大文字で表し、表記形は、take, takes, took, taking, taken といった表記形で

具現化される。

＜構成要素間の関係＞

- (1) コロケーション
- (2) 連辞的結合
- (3) 優先的意味選択
- (4) 談話的韻律

＜構成要素＞

共起語：個々の表記形・レマ（語彙素）
 文法的範疇
 語彙集合：意味的に関連した表記系・レマの類
 話者の態度・談話機能の標識

ここでは、コロケーションが他の項目と並立しておかれているが、コロケーションを結びつきやすい語と語の組み合わせとすると、コロケーションという概念は、(2)～(4)の上位に位置づけられると考えられる。少なくとも、(2)(3)との関係とは重複するものと筆者は考える。次項では日英パラレルコーパスを用い、日本語の用例に焦点を当てて、このモデルの例を具体的に示してみる。

6. コーパス分析：事例研究「対応」

(1) 語構造におけるコロケーション

中心語である「対応」と接続して、「一語」または「複合語」として取り扱われる。中心語の前に来る名詞は、どのような場合の対応かを説明する意味の語が多く、形容詞については、速い・遅いというスピードに関すること、また内容が有用なのかという点を現す形容詞が多い。

a. 中心語の前に位置する言葉

名詞句	危機	+	対応
	緊急	+	対応
形容詞句	柔軟な	+	対応
	迅速な		
	的確な		
	建設的な		
	現実的な		
	適切な		
	総合的な		
	鈍い		

b. 中心語の後に位置する言葉

名詞句	対応	+	策
	対応	+	措置
	対応	+	能力
動詞句	対応	+	する

(2) 連辞的結合（文法上の規制が働いている）

文法上のある形式が規定される接続形でむすびついているもの。

毅然 <u>とした</u>	+	対応
断固 <u>とした</u>	+	対応
社会の変化に <u>即した</u>	+	対応
データに <u>基づいた</u>	+	対応
現実を <u>踏まえた</u>	+	対応
景気低迷 <u>への</u>	+	対応
政府 <u>としての</u>	+	対応

「対応」の前の接続として、動詞の「た」形の接続が多いことがわかる。決してこれは連体修飾形ではない。なぜなら、「対応」を主格として修飾部にもどして元の文を作ると「即した」では意味が成り立たない。「即した+N」の即したは、過去形の「た」ではないからである。

正：対応が社会の変化に即している。

誤：対応が社会の変化に即した。

(3) 優先的意味選択

「対応」が主語または目的語となり文単位で結合力の高い文が考察できる。

A. 受身形で使われやすい動詞

対応が求められる。
対応が望まれる。
対応がとられる。
対応に追われた。
対応を迫られている。

B. 「対応」と共起しやすい動詞

対応を望みたい。
対応を誤る。
対応を促す。
対応を求めた。
対応が遅れる。
対応を協議する。
対応を検討する。
対応に苦慮する。

C. 連体修飾：外の関係

コーパスは、連体修飾の関係の例文を提供してくれる。特に外の関係の連体修飾の例文は実際に使われているものを多く集められて有益である。これは、コーパス利用の大き

な利点といえる。

(外の関係)

- ・慣行や制度の改善にまで踏み込んだ対応
- ・銀行へ特別検査にはいる対応策
- ・消費者の好みに対応する企業努力

(4) その他複合助詞とのつながり

対応に対する意見

法律に従って対応する

結果にともなう対応

以上、パラレルコーパスによって得られた「対応」をめぐるコロケーションを意味および文法形式によって分類を試みた。次項では、このようなコーパスを学習者が手にしたとき、どのような教材を提供すれば、語彙力の増強に役立つ教材をつくりながら考えてみたい。

7. 教材作成

試作 1

「対応」のコンコーダンス画面またはそれを印刷した資料を見ながら、以下のタスクを行うように指示する(参考資料 図1、図2)。

これは、英語教育のDDL教材(Exploring Academic English: A workbook for student essay writing)(Thurstun and Candlin, 1998)による‘issues’(Unit 1, pp.1-5)の練習問題を参考にして作成したものである。

問題 1

次の文を読んで、内容が正しければ「正」に○を、間違っていれば「誤」に○をつけなさい。

- ・「対応」というのは、なにかに反対することである。 正 誤
- ・「対応」というのは、二つの事が同一であることである。 正 誤
- ・「対応」というのは、ある事が他の事に合わせることである。 正 誤

問題 2

「対応」の前にはどんな言葉が来るでしょう。速さ・内容・量 の3つのタイプに分類して下線部に書き込みなさい。

グループ 1 (速さ)

_____ 対応

_____ 対応

グループ 2 (内容説明)

_____ 対応

_____ 対応

_____ 対応

グループ 3 (形式・方法)

_____ 対応

_____ 対応

問題3

「～への対応」という使い方は、たくさんあります。データから3つ見つけて、下線部に書き込みなさい。また、「～に対応した～」という使い方も多くみられます。調べてみましょう。

_____ への対応
_____ への対応
_____ への対応

マルチメディア時代に対応した _____
グローバル化 _____ に対応した _____
少子・高齢化 _____ に対応した _____

問題4

対応の前には、どのようなことばがつかわれるでしょうか。下の から言葉を選んで下線部に書き込みなさい。

変化 _____ 対応が必要だ。
国際ルール _____ 対応するため、
国際政治の現実を _____ 対応しなくてはならない。

にしたがって に即した 踏まえて

問題5 () にはいる正しいことばを { } から選びなさい。

- a. 北方領土問題を含む外交姿勢全体を見守りながら、対応を ()。
{ 1. 検討していきたい。 2. 探していきたい。 3. 予想していきたい。 }
- b. シンポジウムやセミナーを開き、加盟国の理解と対応を ()。
{ 1. 試みる。 2. 決める。 3. 促す。 }
- c. 経済の高成長と急テンポな人口増加の中で、急激な都市化の対応を ()、他の先進国にない特色だった。
{ 1. 追求されたことも 2. 迫られたことも 3. 追われたことも }
- d. ロシアで進行する事態を重視し、対応策を () ため、首脳会議を開くように提案した。
{ 1. 秘密にする 2. 考慮する 3. 協議する }

問題6 以下の言葉を使って、下の文章の下線部に正しいものを入れなさい。

名詞 : 策・能力・緊急・事態

形容詞・副詞 : 柔軟な・現実的な・厳しい

動詞 : 打ち出した・盛り込む・対応した・対応できる

複合助詞 : に伴う・に関しては・として

- a. 身の安全が脅かされるような（ ）への対応、危機管理も忘れがちだった。
- b. 放射線漏れ事故を起こした際の政府（ ）の対応策を基本計画に（ ）ことを決めた。
- c. 融資先への評価が急変した場合、銀行へ特別検査に入る対応（ ）を（ ）。
- d. 金融市場の動きや国際情勢の変化に機敏に（ ）体制が「市場の時代」にはとりわけ重要だ。
- e. 二十一世紀に向け農産物貿易自由化の流れ（ ）農業の基盤強化は必要だ。

問題7 「対応」ということばを使って文章を書いてみましょう。下の文章を読んで、答えてみてください。

- a. 日本では、救急車を呼んでもすぐ病院に入らず、治療が遅れてしまうことがたびたびあります。これは、どうしてだと思いますか。このようなことを解決するにはどうしたらよいでしょうか。
- b. 「対応」と「応対」は、似ていることばですが、使い方は、どこがちがいますか。コーパスで調べてみましょう。
- c. メディアの発達に伴って地球規模化が進んでいますが、このような時代にわたしたちはどのような教育を行うべきでしょうか。

問題解説

問題の趣旨を、以下に示した。

問題1 単語レベルの概念・定義の確認

問題2 名詞として使われた場合に、結びつきやすい形容詞とその内容の確認

問題3 句表現の確認・固定化している句表現の意識化

どのような内容を示すことが多いか、学習者が帰納的に自ら整理する。

問題4 視野に置く範囲を広げ共起しやすい複合助詞を挙げる作業

対象語の前後を広い範囲で理解し、使えるように練習する。

問題5 この問題は、前に述べた筆者の問題意識から、加えたものである。「対応」が名詞で使われた時の動詞部に十分注意を注ぐように促している。

解答：a. 検討していきたい b. 促す c. 迫られたことも d. 協議する

問題6 総合問題としての役割の練習問題である。（ ）に入るべき語の文法的機能の判断と、予想される意味との照合により、適切な言葉を考えていかなければならない。助詞など文法形式が意味を示唆し、意味が文法機能を規定していく言語の伝達の仕組みが実践的な作業で理解できる。

問題7 作文練習：最終目標とすべき、ある語の使用について文脈全体を補う作業である。一語の理解も理想的には作文（パラグラフ単位でよい）によって完結する。

8. まとめ

以上に示したように、日本語教育においては重要な項目にもかかわらず、教師による作例では適切なものが作りにくい分野の例文が、コーパスによると瞬時に実例が得られる。また、理解の助けとなる英訳も備わっている二言語コーパスの使用は、日本語教育の教材作りを帰納的にし、より現実の言語活動に近いものを提示できる可能性を示唆している。また、教師がコーパスを利用することで、教師の経験や能力によって大きな差が生じていた教材や授業内で提示する例文が、内容的にも言語的にも一定のレベルを保持したものになるであろう。このようなパラレルコーパスの利用は、日本語教育全体の質の向上につながるものと確信する。

コーパスの多言語化が今後進めば、英語だけでなくさまざまな母国語の学習者にもパラレルコーパスによるDDLの日本語学習が可能となるであろう。そのような近い将来のためにも、パラレルコーパスを利用した教材作成の指針と課題の設定は、実践的な指導を通して今から進められるべきであろう。

参考文献

- Barlow, M. (2004) Para Conc V (Computer Software).
- 中條清美、西垣知佳子、内山将夫、原田康也、山崎淳史、「日英パラレルコーパスを活用した英語語彙指導の試み」、『日本大学生産工学部研究報告』、38, 2005, 17-37.
- 中條清美、西垣知佳子、内山将夫、山崎淳史、「初級英語学習者を対象としたコーパス利用学習の試み」、『日本大学生産工学部研究報告』、39, 2006, 29-50.
- 中條清美、西垣知佳子、内堀朝子、「パラレルコーパスを利用した文法発見学習の試み」、『日本大学生産工学部研究報告』、40, 2007, 33-46.
- 中條清美、西垣知佳子、内堀朝子、キャサリン・オヒガン（2008）「データ駆動型学習による英語初級者向け文法指導の試み」『日本大学生産工学部研究報告B』41, 15-33.
- Hoey, M. Mahlberg, Stubbs, M. & Teubert, W. (2007) *TEXT, DISCOURSE AND CORPORA*. CONTINUUM
- Hunston, Susan (2006) *Corpora in Applied Linguistics*. Cambridge Applied Linguistics.
- 石川慎一郎（2008）『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト—』大修館書店
- Johns, T. (1997) 'Contexts: the background, development and trialling of a concordance-based CALL program' in Wichmann, A, Fligelstone, S, McNery, T. and Knowles, G. (eds.) *Teaching and Language Corpora*, London: Longman.
- 国立国語研究所（1999）『語彙の研究と教育（上）』
- 丸山岳彦、田野村忠温（2007）「コーパス日本語学の射程」『日本語科学』22, 5-12.
- マイケル・スタッブズ（2006）『コーパス語彙意味論』研究社
- Sinclair, John McH. (1996) The search for units of meaning, *Textus* 9: 75-106.
- （1998）The lexical items. In E. Weigand (ed.) *Contrastive Lexical Semantics*. Amsterdam: Benjamins, pp.1-24.
- 田辺和子（2007）「留学生科目における語彙指導の工夫」『日本女子大学文学部紀要』57
- Thurstun, J. and C. N. Candlin (1998) *Exploring Academic English: A Workbook for Student Essay Writing*. Sydney: National Centre for English Language Teaching and Research, Macquarie University.
- 内山将夫、井佐原均（2003）「日英新聞の記事および文を対応付けるための高信頼性尺度」、『自然言語処理』、10(4), 201-220.